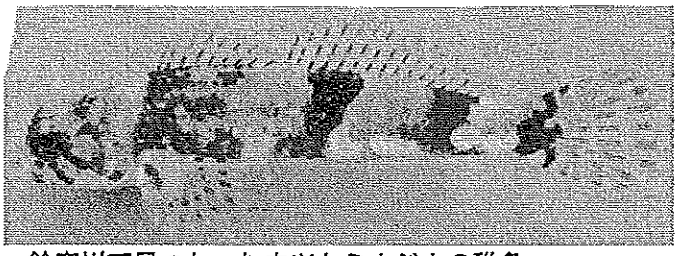
絶滅危惧種の淡水魚「ウツセミカジカ」

鈴鹿川遡上か 稚魚発見



鈴鹿川で見つかったウツセミカジカの稚魚＝「川づくり会議みえ」の中西尚文さん提供

県の絶滅危惧種に指定されている淡水魚「ウツセミカジカ」の稚魚が、鈴鹿市弓削町の鈴鹿川で見つかった。天然の稚魚は海から遡上する習性があるが、河口と発見現場の間には魚が越えられないという、農業用水を引く大きな取水堰があり、どこから来たのかと関係者の間で話題になっている。（佐野登）

難所の魚道超え？

見つかった稚魚は全長約3センチ。地元のケーブルテレビが6月20日、鈴鹿川の自然に親しむ番組の収録で、子どもたちが水深50センチの川岸ですくったたも網の中にいた。

同行していた市民団体「川づくり会議みえ」のメンバー中西尚文さん(38)も珍しい魚にびっくり。持ち帰って調べると、県が05年のレッドデータブックで、絶滅の危険が増大している「絶滅危惧Ⅱ類（VU）」に指定したウツセミカジカと分かり、三重大学大学院水産実験所（志摩市）へ標本として送った。

レッドデータブックによると、ウツセミカジカは本州、四国の太平洋側に分布し、県内では員弁川、安濃川、櫛田川などでしか見られない。冬場に川の下流で孵化して海へ下って2センチほどに成長した4月以降に遡上するが、堰が増えたことで遡上が妨げられて減ったとされる。

今回、見つかった場所は河口から11キロ余り上流。その1・5キロほど下流に取水堰があり、鈴鹿川漁協の矢野英直組合長は「この堰の魚道は機能していない。アユでも上れないほど」と話す。

3センチほどの稚魚がどうやって、たどり着いたのか。三重大生物資源学部の淀太我准教授（魚類増殖学）は「昔は県内で広く見られたが、今では一部。なぜここにいたかは分からない」と首をかしげ、「魚が上りにくい魚道らしいが、遡上時期に水位が増していたもしれない。淡水魚を飼っていた人が放すケースもある。琵琶湖にも生息するので放流用の湖産アユに交じっていたと考えられなくもない」。

理由ははっきりしないが、「レッドデータブックに掲載された魚が見つかるのはいいこと」と中西さん。矢野組合長も「下水道整備が進み、鈴鹿川は以前に比べてきれいになったので、ウツセミカジカがいても不思議ではない」と喜んでいる。

専門家ら「水位増したため」「水きれいに」